INCOMING CLASSIFIED MESSAGE

N.

[redacted] T TOT

PRIORITY

ENTIAL

PARAGRAPHS NOT REQUIRED. HANDLE AS TOP SECRET CORRES
PER PARAS 511 and 60a (4), AR 380-5

RECEIVED
JUN 1947

From: CINCFE Tokyo Japan (Carpenter Legal Section)

To: War (WDSCA WC)

Nr: C-53663

27 June

Reurad WAR 80671, 22nd June 47, held another conference with Tavenner of IPS who reports following:

One on 27th October 1940 Japanese planes scattered quantities of wheat grain over Ningpo. Epidemic of bubonic plague broke out 29th October 40. Karazawa affidavit para 3 below confirms this as Ishii Detachment experiment. 97 plague fatalities.

2 strong circumstantial evidence exists of use of bacteria warfare at Chuhsien, Kinghwa and Changteh. At Chuhsien Japanese planes scattered rice and wheat grains mixed with fleas on 4th October 1940. Bubonic plague appeared in same area on 12th November. Plague never occured in Chuhsien before occurrence. Fleas were not properly examined to determine whether plague infected. At Kinghwa, located between Ningpo and Chupuien, 3 Japanese planes dropped a large quantity of small granules on 28th November 1940. Microscopic examination revealed presence of numerous gram-negative bacilli possessing [illegible] characteristics of petel pestis. I oculation tests were performed on guinea pigs in January 194[illegible] with negative results. [illegible] epidemic of plague occurred in Kinghwa. At Changteh a Japanese plane dropped wheat and [illegible] grains, pieces of paper, cotton wadding and unidentified particles on 4th November 1941. Between No[illegible] 8th and 82[illegible] 5 cases of

CONFIDENTIAL on
DECLASSIFY on
Classified by

CM-IN 4505 (28 Jun 47)

DECLASSIFIED BY ORDER OF THE SEC ARMY BY TAG PER 770475

[redacted]

CONFIDENTIAL

COPY NO.

THE MAKING OF AN EXACT COPY OF THIS MESSAGE IS FORBIDDEN

ノーモア悪魔の飽食

1984年1月10日　初版第1刷　　定価＝980円

著　者　森村 誠一
装　幀　杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
発行者　和多田 進

発行所　株式会社　晩聲社
〒101　東京都千代田区神田駿河台3－2　山崎ビル
電話（03）255－4014／0030　　振替 東京6－50696

印刷　福音印刷株式会社
製本　ナショナル製本
用紙　共和洋紙店
写植　小野禎一

©Morimura S.　　乱丁落丁はお取り替えいたします。
Printed in Japan

イーモア
天使の飽食

誠一

目次

ノーモア悪魔の飽食

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき……8

PART I
「悪魔の飽食」のすべて……12

PART II
対談＝ペンと科学の責任の考量
森村誠一＋M・ウィルキンス……140
対談＝憲法前文は人間の理念だ
森村誠一＋井上ひさし……162

PART III

森村誠一からのメッセージ……180
軍備の魔性……183
星霜をしていた「悪魔の飽食」以後……186
七三部隊の責任を問わない〝日本村の構造〟……190
のどもとの熱さを忘れた改憲論……196
母から子に贈る〝帽子〟……200
コーヒーを喫みながら下される外連の決定……204

PART IV

写真誤用について……216
悪魔の畢業は消せぬ……220
利益共同、運命非共同体の言論企業……225
「悪魔の飽食」の〝現場検証〟……234

脅かされた「悪魔の飽食」……241
私が次に〝対決〟するもの……246
「悪魔の飽食」を書き終えて……250

資料

資料1＝七三一部隊の存在とゾルゲ事件……258
資料2＝元七三一部隊員の引揚げ体験手記……261

写真提供＝光文社

まえがき

森村誠一

本書は、『悪魔の飽食ノート』刊行以後、未発表の『悪魔の飽食』に関する論文、エッセイ、対談、討論、インタビュー等を集めたものである。本書は、一九八二年一〇月上旬に光文社より発行予定であったが、誤用写真事件の発生により出版中止になっていたものが、このたび晩聲社より刊行の運びとなった。晩聲社・和多田進編集長のインタビュー（PART 1）は、その後、加えられたものである。

『悪魔の飽食』一部、二部、三部（以後「本編」と呼ぶ）は、主として証言および米、中国の資料によって構成されているが、本書は『悪魔の飽食』執筆過程の筆者の姿勢や思想がまとめられている。また「本編」刊行後に寄せられた新たな情報等も加えた。

七三一部隊は、定員三〇〇〇名、常時二五〇〇～二六〇〇名の隊員を擁する膨大な構成をもった部隊であった。そのため「本編」に紹介したとおりその組織は多岐にわたり、研究範囲は広範であった。各隊員の体験も多様であり、同じ体験の証言においてすら、ずれがある。現在、元隊員の生存者は約五〇〇名と推定されており、「本編」出版後も今だに多くの証言や情報が寄せられている。元隊員たちにとっては、それぞれの体験が絶対であり、「我が七三一」として記憶の中に定着している。各隊員の貴重な証言を「各論」とし

て、それに基づいて私の平和と民主主義に対する姿勢を明確に打ち出したものが「総論」である。この両論を有機的に構成したものが『悪魔の飽食』である。

過日の中曽根首相、石橋社会党委員長による両党首討論にみられるように、タカ派とハト派の議論は嚙み合わない。自衛のための軍備保持と、戦力のバランスの上に立っての平和維持論は、自衛と攻撃の境界を明確にし得ないし、軍備というものの持つ一級志向および軍隊の存在するだけで緊張を生ずる生理的メカニズムを説明していない。

一方、いっさいの軍備を排除する絶対平和派は、そのことによって日本列島の占める極東の重要な戦略地帯が空白になり、ひいては日本の国際的信用力を維持できない矛盾について答えられない。どちらとも自派の弱点を糊塗しての討議は、争点が嚙み合わず平行したままである。

民主主義の根本原則は、意見の異なる者を暴力的に排除せず、議論を尽くして意見の一致を探す思想と言論の自由の保障にある。われわれは日本の民主主義と世界の平和を達成するために、さらに討議を尽くし、たゆまざる努力を重ねなければならない。

『悪魔の飽食』を出版できるということは、日本の民主主義が健在な証拠である。本書は「ノーモア悪魔の飽食」という思いをこめて製作し、それをそのまま書名にした。本書の出版にあたって、多大のご尽力をいただいた下里正樹氏および晩聲社の和多田進氏、五十嵐雅子氏および関係各位に深甚なる感謝の意を表します。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

PART I

『悪魔の飽食』のすべて

このインタビューは、晩聲社・和多田進編集長の質問に応じて語ったものである。『悪魔の飽食』を核心に据えて、執筆の動機、製作上の困難、取材方法、写真誤用問題、小説とドキュメント論、右傾化への危惧、言論の自由、作家とジャーナリストの責任、天皇と七三一の関係、その戦争責任、今後の方向等、質問は多岐にわたった。
充分に時間をとり、これまで発表されなかった事項についても論議をつくし、筆者の「悪魔の飽食

に関するすべて」を語ったつもりである。
インタビューは一九八三年一〇月三〇日午後一時よりホテルニューオータニにおいて行なわれた。アシスタントは五十嵐雅子氏および小野佳子氏である。

《森村誠一記》

●——私のドキュメント観

——森村さんがお書きになった『悪魔の飽食』の全三部は約三〇〇万部も売れ、この夏、完結いたしました。その間、写真誤用問題をめぐって、出版元が変わるとか、取材の方法、事実とは何かといった問題など、重要な問題を提起されました。教科書における侵略問題やその他、いわゆる「右傾化」状況に対しても積極的な反撃の役割を果たしたと思います。
今日は、そうした経過をふまえて、約三年間にわ

たる『悪魔の飽食』状況といったものの総括、そう堅苦しいことでなくても、この間に森村さんがお考えになったことを、時間の許すかぎり詳しくうかがいたいと思います。そこでさっそくですが、まず『悪魔の飽食』をお書きになった動機というようなことからお話しねがえればと思います。

森村――ぼく自身、ドキュメントを手がけたのは『悪魔の飽食』がはじめての経験です。すでに発表されているように、『悪魔の飽食』は小説の副産物として生まれたのです。最初は小説の材料として取材をはじめて、取材が進む過程で、これは実録として記録しておいた方がいい、小説としての粉飾をいっさいしないで発表すべきであると考えて、そこから『悪魔の飽食』の輪郭が生まれてきたんです。

そして、取材を進める過程で、小説と実録というものの違いが自分なりに次第にわかってくるというのか、区別するようになってきたわけです。小説というものは、だいたいにおいて事実を骨格や基礎にして、その上に作者独自の架空の世界、架空のお話を築くわけですね。ところが、実録あるいはドキュメント、ルポルタージュ、いろいろな呼び方がありますけれど、そういうものになると、事実の上に作者の姿勢なり意見を表明するということは許されるけれども、主体は、つまりコア（核心）は、事実だけであるということになる

と思います。小説の核心が作者独自の架空の世界だとすれば、そこに非常に大きな違いがあると思うんです。私は、ドキュメントを手がけるのははじめてで、その定義もわからず、取材を進めていく過程で、試行錯誤的にドキュメントという概念を自分なりに築きあげてきたつもりなんですが……。

――ではもう一歩進んで、小説家としての森村さんの「ドキュメント観」といったことを開陳していただければありがたいのですが。

森村――小説家がドキュメントを書く場合は、当然のことながら、いわゆる専門のドキュメントライターとは違った「味つけ」があるんじゃないか、またあってしかるべきではないかと思っています。作者それぞれによって手法は違うと思いますけれども、ぼくの場合は、ただ事実のリポーターという形で報告するだけだったならば、なにも小説書きがそんなドキュメントをやる必要はないと思うんです。そこは小説家としての「におい」といいますか、「体臭」「味つけ」、そういうものがあってはじめて小説作家がドキュメントを手がけた意義が出てくるんじゃないかと考えています。それから、『悪魔の飽食』を書いているあいだに、取材、構成、執筆をとおして思いついてきたのは、事実をただ単に報告するだけじゃなくて、戦争というもの、平和と民主主義というもの、それらはどうあらねばならないか、それらを維持するために私たちはどういう努力を重ねなければいけないか、といった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com